

## 「令和版 新・BCLマニュアル」プレゼント、応募メール

～ 私と BCL ～

---

お名前 = 平田淳一 (東京都昭島市)

40数年くらい前、私も海外の放送局を聴くために周波数を語呂合わせで覚え放送をきいておりました(例えば、響くごんごんとか)。

当時、ソニーとナショナルが高価なラジオを販売していてナショナルのラジオが欲しかったのですが高価過ぎて買えず、自宅にスリーバンドが受信出来るラジオがありそのラジオで深夜聴いていたのですが立地条件が悪く外部にアンテナを張らないと聞こえず苦勞致しました。

聞こえた時は受信報告書を書きペリカードをいただいた思い出があり、今でも、自宅に数枚ペリカードがあります。

1970年代から80年代にかけて全盛期を迎えた違法CB無線。

当時、自分達も流行に乗り??違法CB無線を友達とやっていたのですが電波法110条が改正になり

「1年以下の懲役又は5万円以下の罰金」→「1年以下の懲役又は50万円以下の罰金」なりこれは捕まったら大変と言う事で友達と話し合いアマチュア無線の資格を取得する事になりました。

当時参考書がいっぱい販売されていてどれを買えば良いのかさっぱり解らなかったのですが

「ハム合格大作戦」の半年間勉強して一発で合格する事が出来ました。もしBCLブームが無ければアマチュア無線の資格も取る事が出来なかったのではないのでしょうか。

---

お名前 = 細川 斉 (札幌市白石区)

中学2年生だった、1977年に、関東から来た転校生に「BCL」の存在を教わり、文字通りはまってしまいました。その彼とは今も交流が続いています。そして、ラジオたんぱで、「ヤロメロ」を聴き、今は憧れの大橋照子

アナウンサーとも仲良くさせていただいております。HCJBの尾崎一夫先生の放送にも出演させていただきました。すべては、BCLとの出会いがあればこそで、電波新聞社、そして、山田耕嗣先生には本当に感謝しています。

---

白井敏二 (千葉県君津市)

経済的な事情からスカイセンサーやクーガなどのBCLブームの中で販売されたBCL専用ラジオを買うことが出来ず、たまたま家にあった3バンドラジカセで短波放送が受信できたので、それを使用していました。付属のロッドアンテナでは十分に海外の短波放送が受信できないため、我が家の隣の農協で伯父が参事をしていたことがあるということで、そのつてを利用して、農協のビルと我が家の間に高さ5メートルほど、長さ30メートルほどのアンテナを張らせてもらって、BBC、ドイチュベレ、ラジオベリタス、バチカンの声、ラジオオーストラリアなどを聞いていました。

---

一條克広 (秋田県秋田市)

私にとってBCLとは、国内AMラジオの受信であった。夜になると北海道でも雑音の中、東京のAMラジオを聞くことができた。もっとクリアに聞きたくてMズホのループアンテナをお小遣いはたいて買った。いくらか

クリアになった…といった程度であった。カーラジオは、比較的クリアに受信できるため、遠くの局のラジオ番組を聞くために山の方へ夜のドライブを毎週したこともあった。旅行に行く時、チューナー付きカセットレコーダーが必携であった。その地方でしか聞けない放送を聴取、録音するためである。一時期は、ラジオ番組を聞くため、録音するため旅行をしていた。東京で泊まる時は、千葉や埼玉に宿を取った。TBS、文化放送が比較的クリアに受信できるからである。東京都内は、AMの受信状態がすこぶる悪かった。名古屋は、市内でも比較的受信状態が良かった。大阪は、場所によってクリアに受信できないところがあった。地方では思いもかけずその地方の楽しい番組を、聞くこともできた。旅は地方の番組との出会いでもあった。

雑音の中、遠くの局を聞くことも、ラジオを聞く旅も、もう今は、やめてしまった。なぜか。そう「ラジコ」の出現である。ラジコは、ラジオ好きの価値観をすべて変えてしまった。今度の旅は、どこに泊るか。どこの局が受信できるか。どの番組が聞けるか。こんな検討は、一切なくてよくなった。どこの局が受信できるか。どの番組が聞けるか。番組を聞く楽しみ、情熱も薄くなった。ラジオは今でも大好きである。素直に、手軽に自由にラジオが聞けるようになったと納得すればよいだけなのだ。

BCL、電波の未来は、どうなるのだろうか。AMの未来は。地上波の未来は。ラジオの未来は。気になってしょうがない。

---

境谷典之（山口県山口市）

今から四十数年前のBCLブームのころ、私は中学生。BCL仲間の友達の家に泊まり込んでRSA（南アフリカの声）の受信に挑戦しました。ラジオはソニーのスカイセンサー5900と5800。雑音の中から南アフリカの声を確認できたのは深夜から明け方にかけてだったか。一睡もせず朝を迎えて、今度は二人で受信報告書を作成。放送も英語なら、報告書も英語で書かなくてはならない。とても、苦勞をしました。どちらかと言えば、私が主導して書いた受信報告書でしたが、友達にはベリカードが、一方、私には、報告書が不十分でベリカードは発行できませんとの手紙が届きました。子供心に「納得できないなあ」と思ったものです。

それから、その頃聴いていた北京放送やドイツ海外放送（ドイチェ・ヴェレ）には、詩や作文のコンクールに応募して、それぞれ賞品をいただきました。北京放送からはパンダの掛け軸、今も床の間に飾っています。ドイツ海外放送からは畳1畳ほどの大きさの大きな絵、ただ、額装はされておらず、画布が丸められて送ってきていたので、物置にしまっておきました。その後、絵画鑑賞が趣味になり、あの絵はどこにいったのかと探したのですが、行方不明。とても惜しいことをしたと悔やんでいます。

---

川野 和博（東京都八王子市）

1970年代から80年代初めにかけて、日本の中高生の間で、BCLブームがわき上がったのを今でも鮮明に覚えています。何を隠そう私もその一人でした。

インターネットも無い時代、見様見真似でアンテナを張り巡らし、ミリ単位でラジオのチューニングをしました。聴取した証に多彩なデザインのベリカードが送られて来るのはすごく魅力的でした。

しかしBCLブーム最中、確か1976年に郵便料金の大幅値上げがあって（封書定形20円→50円など）若年層にとっては受信報告書の郵送代の経済負担が大きくなり、また外国語の放送もそれを楽しめるだけの語学力がなければベリカード収集後の継続的な目標を立てるのは難しくなっていました。

ちょうどその頃です。父親の購読していたスポーツ新聞で「キャンディーズ情報局」が日本短波放送で始まったと言う記事を目にしました。

NSB・現在のラジオ日経社です。

大のキャンディーズファンだった私は手慣れた手つきで3バンドラジオのチューニングをしました。私の住んでいたのは鹿児島で日中、受信出来るのはNHKと民放の南日本放送の2局程度です。

東京からダイレクトに飛んでくる番組は新鮮で刺激的でした。

その日を境に、ほぼ毎日、日本短波放送を聞いていたのを覚えています。

その時にDJをやられていたのが、大橋照子さんです。

もう大橋さんとは46年来のお付き合いになります。

当時のBCLブームが無ければこの出会いはありませんでした。

そのようなご縁があって1978年あたりに発刊された「BCLマニュアル」も読ませて頂いた記憶があります。今回の令和版・BCLマニュアル発刊で当時の記憶が鮮やかに甦りました。本当にありがとうございました。

---

早川 裕之（大阪府北区）

私がBCL（海外放送）と出会ったのは、小5、6年の頃でした。

きっかけは、当時家にあったナショナルの3バンドラジカセで、SWの意味もわからず

切り替えスイッチをAMからSWにしてチューニングダイヤルを回していると中国語や韓国語、英語に混じってノイズ混じりの日本語放送を聞いたのがきっかけでした。

当時はすでにBCLブームの後半でしたが、「ラジオの製作」等の雑誌類は豊富に書店にあったため、購入し、アンテナの張り方などを学び、家の屋根に親に内緒でワイヤーアンテナを張って海外の日本語放送を聞いていました。

その中で当時の「日本短波放送」に出会い、ギャングパーク・ヤロメロの照子さんにも出会うことが出来、60歳前の今日でも短波から離れられずに居る現在です。

現在では日本語放送も少なくなり、寂しい限りですが、元気な内は聞き続けたいと思っています。

---

乾 義郎（奈良県生駒郡）

小学校5年生の頃、唯一定期購読していた雑誌にたまたま掲載されたBCLの記事。ラジオひとつで世界と繋がる。奈良の片田舎に住んでいる私にとっては、夢のような話でした。その雑誌に毎月のように広告掲載されていたGデザイン賞のラジオを何とか買って貰い、晴れてBCLデビューです。イギリスBBC、バチカン、カワセミオープニングのオーストラリア、ブエノスアイレス、ドイツベレ等々、夢中になりました。

でもひとつだけ、心残りが……。どうしても聴けなかった局、それは「アンデスの声」。外付3mロッドアンテナを立ててもダメ、家の壁沿いに31mのワイヤーを張ってもダメ。その後に発売された直ダイメカやデジタル周波数表示が正直とても羨ましかったです。

中学生になると、海外放送より、国内のディスクジョッキーに興味の対象が移ってしまい、NSBの大橋照子さんや中波深夜ラジオの笑福亭鶴瓶さん等に夢中になってしまいました。BCLらしきものといえば、FENのTOP40くらいでしょうか。

あれから四十数年、先日、ちょっと調べてみると、海外日本語放送は殆ど無くなってしまっている、との事。現代は、ラジオではなく、インターネットが「世界の窓」なのではないでしょうか？ それでも恥ずかしげもなく断言できます、私自身のあらゆる根源はラジオです！

---

佐藤則仁（東京都練馬区）

私が、短波放送を聴くようになったきっかけは、1976年当時、現役の大学受験生で、「旺文社大学受験講座」を聴くために、スリーバンドのラジオを買ってもらい、メカに詳しい弟にロングワイヤーを張ってもらい名古屋で日本短波放送（現・ラジオ日経）を聴きました。守備よく大学に合格し、1978年から大船渡で日本短波放送で、タモリさんとアシスタントのアナウンサー富永陽子さんの『BCLワールドタムタム』と言う番組が、お二人の掛け合いが面白くなって夢中になって聴きました。番組で中国のラジオ体操の番組をタモリさんが紹介してたので、実際に大船渡で聴いてみたら、中国語で日本とそっくりな体操の音楽をやっていた事が印象に残っています。それから「ベトナムの声放送局」「アンデスの声」の番組が面白いという紹介がありましたが、大船渡では受診できませんでした。結局、大橋照子さんの「お早うございました。」で終わる「ミュージック・アラカルト」で起きて、夕方5時の「ヤロメロ」の前に下宿に帰る大学生活でした。

---

伊賀上誠二（愛媛県伊予郡）

その日、世界が突然、私の部屋にやって来ました。

高校生の頃、小遣いを貯めて、短波放送も受信できるスリーバンドラジオを買って、大切にしていました。

AM、FMには馴染みがあるけど、短波って、どんなんだろうとダイヤルを合わせました。

それが、私と世界が、電波をとおして、直接繋がった瞬間でした。

外国語が飛び交い、寄せては引く波のような電波を追って、未知の世界を探検する冒険者になったのでした。

と、ある日、合わせたダイヤルに、日本の楽しげな女性のしゃべり声が聴こえてきました。

それが、大橋照子さんでした。

放送スタジオには、リスナーの方も入って、楽しくワイワイ、笑い声の絶えないひととき。

照子さん（私たちは、こう呼ばせていただいています）との出逢いは、私の新しいページの始まりでもありました。

AMやFM放送局ではあり得ない、短波だからこそ、そして、照子さんだからこそ、リスナーとの心の絆。そのお声を聴く時間は、懸けがえのない、宝物となったのでした。

やがて私は、社会人となり、一時離れた時期を経て、再び巡り逢うことができました。

以来、生涯の憧れの御方として、交流させていただける幸せを、神様に感謝しているところです。

あの頃の「ラジオの制作」や「アマチュア無線運用マニュアル」も、懐かしいです。

今般の「新BCLマニュアル」、照子さんが執筆された記事を拝見する機会を得ることは、あの頃の自分にも出逢えるような心地がいたします。

出版してくださり、本当にありがとうございます。

---

緒方 新一（東京都新宿区）

いまから40年以上も前の学生時代、熊本から照子さんのラジオ番組（ラジアメ、カプチーノ、コレキメ、シャベリバ）を聞くのに必死でした。地元局（RKK熊本放送）で放送があれば安心なのですが、聞き逃したり、放送が無い番組もあつたりした時に歯、東京の法則局、大阪の放送局の放送時間を調べて、深夜にも関わらず電波状態の良い場所まで車を飛ばして放送を聞いていたことを思い出します。

私はアマチュア無線をやっていたので BCL ということを本格的にやっていたわけではありませんが、自宅のラジカセやステレオ、車のカーラジオを駆使して放送を聞いていた時代が懐かしいです。その後にナショナルのクーガーを手に入れたりしましたが、ロングワイヤーアンテナを設置するなどの面倒なことは出来ずで、結局は車を飛ばして聞いていた、という k としか思い出せません。

私と照子トさんの出会いはラジオ短波の「子門と照子の QSO ジョッキー」なんですが、この番組をきっかけに無線関係の高専に進学するなど、私の人生を照子さんが BCL が変えてしまったのかも知れませんね。

今でも良い思い出ですし、この歳になっても照子さんと関われる人生、機会を頂けていることに幸せを感じています。

---

大津雅秀（兵庫県芦屋市）

令和版 BCL マニュアル刊行おめでとうございます。BCL を始めたのは半世紀以上も前、家にあった真空管式の短波・中波ラジオで。お決まりのように遠距離中波局から短波の日本語放送へ。そのうち日本語放送は内容が画一的過ぎて面白くなく、圧倒的に放送内容の充実している英語放送へ。英国大使館から毎月送られてくる BBC world service の番組紹介冊子「London calling」で関心のある番組をエアチェックして、一生懸命ディクテーションして英語のリスニング力もかなりつきました。インド首相のガンディー追悼演説だとか、エンクルマ大統領のガーナ独立宣言など BBC の持っている歴史的な録音も聞くことができた。当時高校3年の英語教科書にはこのネルーの追悼演説がリライトされて載っていて、オリジナルの録音を授業で流してもらったのも思い出である。10代20代の自分の人間形成にも BCL は深く関わった趣味だったと思います。

---

遠藤康之（山口県萩市）

BCL、今回これを書くにあたって BCL について検索してみました。「遠距離のラジオ局を聴く。とりわけ海外の放送局を聴く。」と出ていました。

1972年、中学入学の時に買ってもらったラジカセ、当時のラジカセは普通にスリーブバンドの物が多くありましたね。地方に住んでいると FM は NHK しかないので、中波をよく聴いていました。

地元の放送局から始まり東京の放送局、そしてラジオ雑誌の番組表をチェックしながら、大阪・福岡・名古屋に札幌など、受信しやすい出力の高い大都市のラジオ局にチューニングを合わせていました。これも遠距離のラジオ局ということで BCL の一つでしょうか。

そして、テレビ CM で流れ出した「ワライカワセミの声で始まるラジオオーストラリア」のフレーズに引かれ、海外の短波放送にもダイヤルを合わすようになりました。

短波放送で苦労したのはフェージングでした。当時はデジタルでなくアナログダイヤルなので、微妙なダイヤル調整に苦労と面白さを感じていました。

高校生の頃、「この時間、海外の放送は何をやっているんだろう」と夕方5時に、時差も考えずダイヤルを回していると、女性の可愛らしい声と大勢の笑い声が聞えてきました。

短波放送ならではの雑音と、短波は海外の放送という思い込みから、その番組が当時の日本短波放送の番組と気づくのに少しの時間を要しました。

新聞のラジオ欄には「ヤロウどもメロウども OH」の文字、大橋照子さんとの出会いでした。社会人になると、仕事で生で聴けないのでタイマー録音をしていたんですが、朝チューニングしても夕方には微妙にズレているんですよ。それもひっくり返って短波放送、BCL の面白さでした。

---

大津雅秀（兵庫県芦屋市）

BCL という短波のイメージですが、遠距離の中波局の受信も面白いものでした。日本海を挟んだ朝鮮半島やロシア沿海州、中国大陸の大出力局の隙間を狙って、台湾やフィリピンの低出力局が受信できた時の喜び。ノイズ対策で家じゅうの電気製品をオフにして、もっと遠距離のアラスカやインド・カルカタ、西ドイツのバイエルンラジオ、エジプトのラジオカイロなどが受信できることもありました。インドやエジプトの不思議な香りのする現地のポップミュージックが聞こえてきて感激したものです。

---

大津雅秀（兵庫県芦屋市）

BCL は国際理解に役立つという面もありますが、国際政治の熾烈な電波戦争の現場でもあります。当時宮永陸将補事件のようなソ連のスパイ事件、北朝鮮からの暗号放送など、警察の公安が捜査対象にする現場でもあり、国会でも青少年が短波放送を聞くことの是非が論じられていたと思います。政治思想のプロパガンダや宗教の布教など、聞いている中高生は良くわきまえていたと思います。ベトナム戦争の末期、サイゴン陥落の直前、南ベトナム国営放送が4月28日に突然停波した瞬間とか、高校から帰ってまず聞くのを習慣にしていた中国国内向けの第一広播電台の放送が、通常の番組から音楽に差し替えられて不思議だなあと思っていたら、夕方17時「新聞」（ニュース）で毛沢東逝去の報道がされたのを聞いたのも、国際政治のど真ん中にいると実感させられた経験でした。

---

大津雅秀（兵庫県芦屋市）

エクアドルの HCJB 日本語放送の尾崎一夫さんから自筆のお返事を貰ったリスナーは多くいると思います。沢山のリスナーに返事を書かれるご苦労は大変なものがあったと思います。文通という意味では、Radio Australia 英語放送の「Mail box (Mail bag?)」という番組で自分の投書が紹介され（どういう内容を書いたのかはもう記憶がありませんが）、住所氏名も読み上げられたのがきっかけで、スリランカとマダガスカル、インドのリスナーから手紙が届いて、しばらく文通をしていたことがあります。短波ラジオで読み上げられる住所・氏名で、無茶苦茶なスペリングなのに、日本の郵便屋さんによくぞ探し当てて届けてくれたというような宛所でした。先方は電気技術者とか工科大学の学生さんでした。受診の苦労話や好きな番組のこと、もちろんそれぞれのお国柄のことなど、生きた英語の勉強にもなりました。日本語放送がある放送局の英語放送まで聞く人もましてや手紙まで書く人は少なかったのでしょうか、ほぼ毎週聞いていましたが日本からの投稿はほとんどどなかったように思います。

---

岡田和明（埼玉県熊谷市）

BCL との出会いは、中学生の頃だったでしょうか。あるラジオ関係の雑誌がきっかけでした。当時、家に短波のバンドが付いたラジカセがあったので、日本語放送などを聴きました。その時に、ラジオたんぱも聴くようになり、ヤロメロのリスナーになりました。本格的なBCLラジオが欲しかったのですが、中学生の私にはちょっと無理でしたね。社会に出て自分でBCLラジオを買えるようになった頃には、ブームが下火になっていったので、悲しかったです。

---

大津雅秀（兵庫県芦屋市）

カラフルな絵柄のペリカードも少しは集めましたが、それ以上に英語放送を一所懸命聞きとって放送内容についての受信報告を「つたない」英作文で送ると、放送局からカードだけでなくしっかりした文書でお返事が貰えました。当時人気のあったオランダの Radio Nederland の ‘Happy Station’ の DJ Tom Meyer さんからは何度も直筆のお返事を貰って、英語が通じていると実感できました。そのご縁で大橋照子さんの LP レコードから彼女の歌う「素敵な昨日」を全世界に向けて放送してもらおうことができたのも良い思い出です。高校の英語の授業よりも BCL が、僕の英語の生きた教室であったと思います。

---

大津雅秀（兵庫県芦屋市）

中学高校時代には、まさか自分が海外に行くことなどないだろうと思って BCL で世界旅行をしていました。後年、ローマに行く機会があり、空き時間を使って、バチカンではなくローマ市内にあるバチカン放送をノーアポで訪問しました、放送局のセキュリティの厳しい今では考えられないでしょうが、reception で日本から来たと言ったら、すぐ日本語部に電話連絡してくれて、副調室や放送スタジオも見学させてもらえました。神父さんばかりがおられるので不思議な雰囲気でした。日本語放送が亡くなってもう 20 年以上になりますが懐かしい思い出です。海外局を訪問したのは後にも先にもこれ一度きり。

---

大津雅秀（兵庫県芦屋市）

BCL の範疇に入れてよいかわかりませんが、放送ではなく業務無線も聞いていました。短波の航空気象通報のボルメット、今は電波時計が時間校正に利用している標準電波局、船舶の海上交通管制のハーバーレーダー、対漁船通信を行う海岸局。当時はまだ秘話機能がなくて通話がそのまま聞こえていた電電公社の船舶電話、KDD の国際基地局間の回線試験 PTT 通信、NHK 第一放送の災害時バックアップ用の短波補助回線、人工衛星のビーコン信号、航空無線、聴こえてくる電波は何でも聞いていた時代です。これらの業務システムがどのように成り立っているのか、電波だけではなく組織のシステム・運営という方面にも関心が向きました。

---

「電波新聞社」さんからの選考結果メールを貼り付けます。

.....

お世話になっております。リスナー様のお手紙ありがとうございます。

非常に迷いましたが、お二人選ばせて頂きました。

選ぶのに困るという大橋さんのお気持ちが大変良くわかりました。

結果的に大橋さんにお手間を取らせ申し訳ございません。

今後ともよろしく願いいたします

一條 克広 様（秋田県秋田市）

伊賀上 誠二 様（愛媛県伊予郡）

電波新聞社